

さらに進化・発展する個別化診療を支える 基盤としての病理

「がんゲノム医療、分子標的治療を担う高い質の医療情報提供」

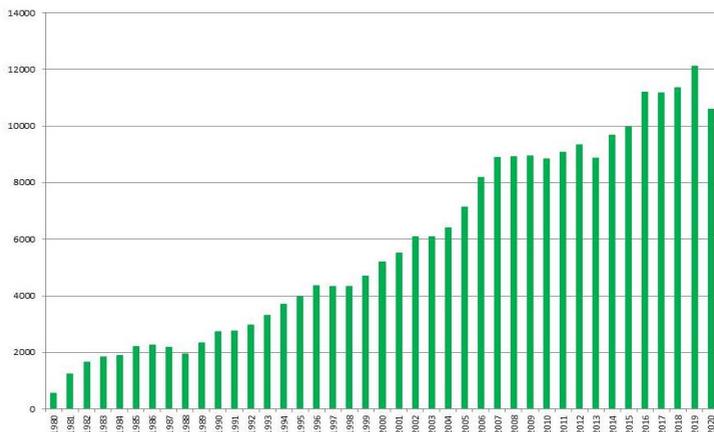
近年発達のめざましい分子学的医学的知見、がん診療の中で、がんゲノム医療がとりわけ注目され、がん診療は新たな局面を迎えています。このがんゲノム医療には、適切な検査検体の確保が必須ですが、現段階ではその検体は病理検体が中心となっています。遺伝子解析のためには検体の適切な固定が必要ですが、当検査室では、検体の固定に関して、採取後の速やかな固定、DNAの破壊に繋がる過固定の回避の伝統が、長年に渡り踏襲されています。その為やや古い検体についても、これまで当院で実施されたがんゲノム検査で検体不適による検査不能例はほぼ皆無であり、極めて良好な情報が得られています。また、臨床からの依頼を受けると速やかに検体を準備し、一日でも早く結果を届けられるよう、努めています。

「国際標準化機構 ISO15189 の取得 ～信頼される検査室をめざして～」

ISO(International Organization for Standardization)15189 は、検査結果の質を管理、担保するため臨床検査室に対して課せられた国際基準です。検体採取から結果報告までのすべてのステップに関して詳細に取り組むべき事項が規定されており、これにより、より信頼性の高い結果報告を提供します。新病院ではハード面でもこの基準を満たす機能的、安心安全な検査室に生まれ変わります。

「診療実績」

病理組織件数は開院以来概ね右肩上がりに増加しています。2020年は、新型コロナウイルス蔓延に伴いやや件数が落ち込みましたが、本年はまた増加傾向です。



「癌拠点病院・研修指定病院としての病理の役割」

がん拠点病院を支える病理診断科として、治療方針の決定、治療の効果評価に寄与する確かな病理診断の提供すべく、常勤病理医 2 名に加え、非常勤医師として、広島大学病理学武島教授、元広島市民病院病理診断科主任部長の松浦博夫先生、広島大学病理学、神原貴大先生の強力な支援を得て、6 名の細胞検査士を含む 7 名の臨床検査技師、病理診断補助員、事務員とともに、一丸となって取り組んでいます。

また、研修医教育制度において、全人的病態把握の学習の観点から院内臨床病理検討会（Clinico-Pathological Conference）は欠かせません。地域の先生方には、CPC 開催にあたって患者様の情報提供をお願いしてまいりましたが、引き続きご理解とご支援のほど、重ねてお願い申し上げます。

広島市立北部医療センター 安佐市民病院 病理診断科 医師スタッフ紹介

かねこ まゆみ 金子 真弓 (H4卒)	病理診断科主任部長・臨床検査部主任部長 〔外科病理一般・乳腺病理〕 広島大学医学部第二病理で乳腺の前癌性病変の研究により学位取得 専門分野は乳腺病理
きむら しゅうじ 木村 修士 (H25卒)	病理診断科医師〔外科病理一般〕
えがわ ひろみ 江川 博彌 (S47卒)	臨床検査部医師 広島大学医学部第二病理にて毒ガス障害者の気道粘膜病変の研究により学位取得。現在、臨床検査医としての嘱託勤務の傍ら、呼吸器疾患の病理診断も担当

非常勤医師紹介

たけしま ゆきお 武島 幸男教授	広島大学大学院医歯薬保健学研究院病理学研究室 昭和 62 年広島大学卒。悪性中皮腫・呼吸器・婦人科腫瘍などを専門にしており、悪性中皮腫取扱規約の規約委員
まつうら ひろお 松浦 博夫先生	元広島市立広島市民病院病理部主任部長 昭和 48 年広島大学卒
かんばら たかひろ 神原 貴大先生	広島大学大学院医歯薬保健学研究院病理学研究室 平成 28 年広島大学卒